

2022 夏 新型コロナ・オミクロン株蔓延の中敢えて山へ(個人山行)

2019 年中国で発した新型コロナウイルス、その後様々な変異株を生じ、今はオミクロン株が猛威を振るい日本は異常なほどの感染者増となって医療現場は大混乱だ。2 年前なら戒厳令もみかずの状況なのに何故か行動制限とはならず、それをヨシとして敢えて山へ向う。80 歳となり先行き短き人生、動けるのはせいぜいあと 2~3 年なのだ。

▲ ▲ ▲ その 1 懐かしき大雪溪・白馬岳 (2932m) ▲ ▲ ▲



(小蓮華山から白馬岳を望む)

◎期日 : 7月20日(水)~22日(金)

◎メンバー: 赤澤他1名(妻)

これが3回目となる白馬岳。1回目は今から61年前、1961(昭和36)年8月浪人中の事、高校時代の仲間4人と大雪溪を登り白馬岳山頂からは清水平を経て祖母谷温泉に下山し、黒薙温泉から日本海へ抜けた。往復共に夜行列車を利用(往きは新宿21時30分発準急「こまくさ」で信濃四谷まで700円、復路は魚津から直江津へ出て準急「妙高」にて大宮へ650円)、車中2泊、山中3泊、計5泊6日の山旅、あの頃の受験生は呑気なものだった。

2回目は36年後の1997(平成9)年7月単独行。白馬頂上からは雪倉岳、朝日岳を経て蓮華温泉に泊まり糸魚川へ抜けた。往きは新宿発23時54分発臨時電車「アルプス85号」白馬駅着5時45分6500円、帰りは糸魚川から直江津へ出てホクホク線で越後湯沢からは上越線~高崎線と乗り継ぎ5時頃帰宅した。

今回は夜行バスを利用する。相棒は浮かぬ顔だが新宿⇒猿倉8150円と安価で時間も効率的に使えるので便利である事を強調する。が、案の定殆んど眠れず大雪溪では調子出ず息絶えだえとなり臍を噛む羽目となり夜行バスは年寄りには難しいものがあると反省した。

今にも降り出しそうな雲行きの中、6時35分猿倉を出て白馬尻に来てみると小屋が無い。ここには白馬尻小屋と白馬尻山荘と2軒の山小屋が建っていた筈だが雪崩にやられたのだろうか、基礎部分が残されているだけで少し驚く。同じバスで来た人達はもう大雪溪に取りついているようで、先行者4~5名

寛いでいるのみ、コロナもさることながら、この所の不安定な天気のせいもあってか人出は極端に少なく拍子抜けの感。

8:45 軽アイゼン装着し大雪溪へ踏み出すも、歩きだしてすぐにアゴを出す。目に入る先行者は30名程で、これはもうかなり上において、後続は10人いるかないかという程度。97年の大雪溪では長い行列が出来ていた事を思い出し、時期が同じなのにあまりの違いに唖然とする。



(↑ 登山者が少ない大雪溪、今回の様子。下の25年前の写真と比較されたい)

久しぶりの大雪溪は寝不足のせいもあり足が
あがらず苦しくて先行者との距離は開くばかり、
後続の何人かにも抜かれ、2時間半以上かか
って漸く大雪溪が終了。岩に腰掛けアイゼン外
して右手の尾根を青いロープに添ってジグザグ
の急登を繰り返す、しばらくして小雪溪に行く
手を阻まれた。ロープはあちこちに散乱してい
て生憎のガスでどっちへ行ったものか分から
ない。

過去2回とも人が多く先行者の後を付いてい
けばいいだけだったが、今日は人の気配は
なくまよと雪壁に取りついてみたが軽アイゼ
ンとストックではとても無理、わずか10分位
なものなのにと恨めしいがともかく引き下がり、
ウロウロしていたら、山小屋の関係者らしい男
性が登ってきたので指示を仰ぐ。左手小沢を渡
り少し上って右へ大きくトラバースするとの事
でヤレヤレだった。

その先避難小屋辺りから恐れていた雨が降り
だし村営頂上小屋からは本格的な雨となり小屋
から山荘までの苦しかった事、すっかり濡れそびれ15:50 漸く白馬山荘に到着。猿倉からなんと9時
間15分、25年前は途中で20分程昼寝したにもかかわらず6時間だった事を思うと、なんともお粗末な

(↓ 25年前の同時期の大雪溪の混雑の様子。2枚共)



限り、もう笑うしかない。2人共心底バテバテで小屋に入るやいなやベンチに倒れ込んでしまったものだ。

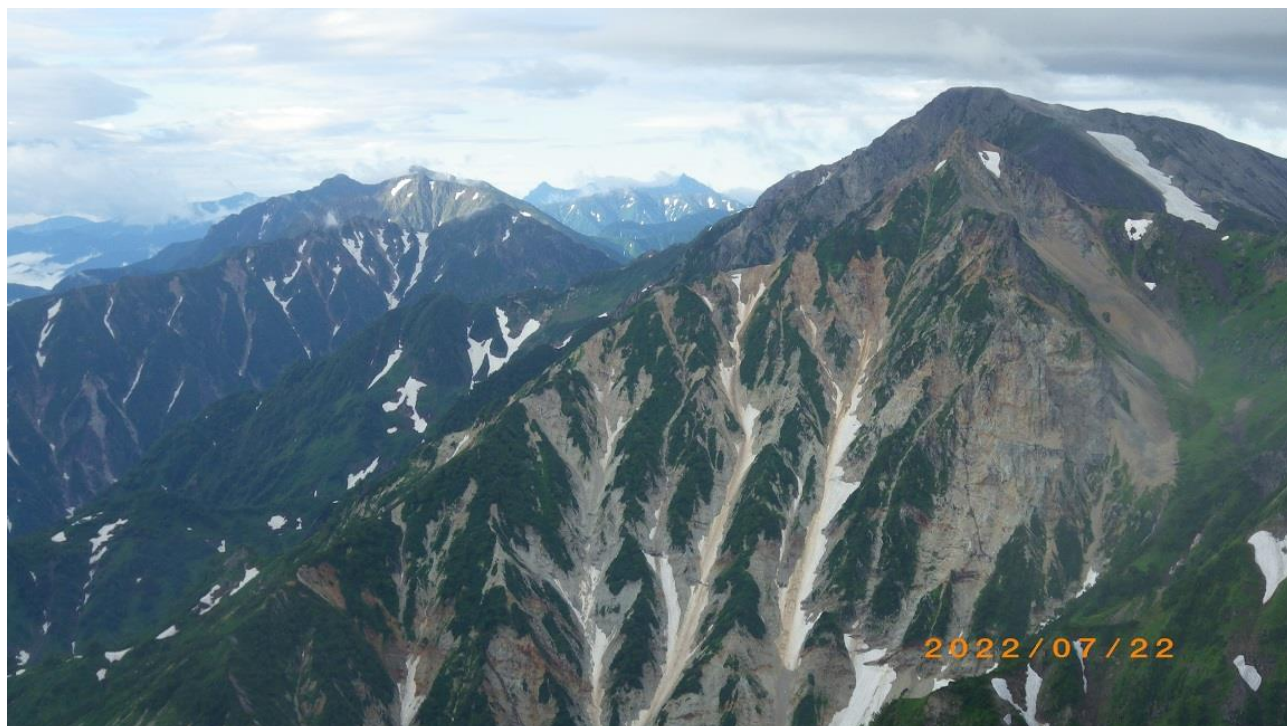
この日の宿泊者70名余、25年前は1500人、畳1枚に3人という体験をした身には実に信じがたい。あの日1時頃到着だったので受け付はすぐに済んだが、3時過ぎに到着した人達は受付まで2時間待ちだった。夜中強風雨だったらしいが疲れたせいも熟睡。

(↓ 雨の白馬岳山頂)

2日目、4時起床、軽食済ませ5:15誰よりも早く雨の中出発。三国境付近から雨が上がり途中雪倉岳等も見えてきて、小蓮華山からは鹿島槍の右手に遠く槍ヶ岳も確認出来る位に青空が広がりニンマリする。昨夜の風雨を思えばこれはラッキー、こういうご褒美があるから山は止められないと昨日の苦勞が少しは報われた思い。



(↓ 小蓮華山より、左：鹿島槍、中央：槍ヶ岳、右：杓子岳を望む)



白馬大池から乗鞍岳を過ぎ天狗原辺りまでは雪渓と雪田交じりの大石ゴロゴロした歩き難い道で途中から又雨となってしまう雨具を着こむ羽目となったが13:05 梅池ロープウエー駅に無事到着、バスを乗り継ぎ9時過ぎに帰宅する事が出来た。楽しみにしていた久しぶりの大雪渓、残念ながらこれはもうノーサンキューと云うしかない心境である。

《コースタイム》

1日目：猿倉6:35→7:50 白馬尻小屋跡8:00→大雪渓末端8:45→11:20 大雪渓終了点11:30
→15:25 村営小屋→15:50 白馬山荘

2日目：白馬山荘5:15→5:35 白馬岳山頂5:40→6:20 三国境→7:15 小蓮華山→8:10 船越の頭
→8:55 白馬大池9:10→10:05 乗鞍岳→13:05 梅池ロープウエー駅



(叶ノ高手 (1430m) 先から見上げる朝日岳北壁)

◎期日：7月29日 (金)

◎メンバー：単独

住いの関係から奥日光、上信越、南会津方面の山々に深い関心を抱いているが、この山の存在を意識したのは2003年4月、近くの城郭朝日山に登った時の事だから比較的新しい。文献を漁ってみて分かったのは山が深く人目に触れることがなかった故に登山の対象に成り難くかったようで、1953 (昭28)年、奥只見で田子倉ダム建設工事が始まり、国道252号線や国鉄只見線が整備された事により徐々に注目されるようになったという。手元の「尾瀬と会津の山々」川崎隆章編・修道社・昭和36・5発行に元立教大学ワングル部主将・大中睦夫氏の〈朝日岳・丸山岳〉が載っているが、私が知る限りではこれが一番古い記録で昭和33年8月に黒滝川を遡り途中から小幽沢に取り付き裏側から登っている。他には昭和20年代に地元坂下町の小滝清次郎氏、30年代に市川学園山岳OB会が精力的に歩かれている。

又、「折々の山」望月達夫著・茗溪堂・1980・7・発行によれば昭和46年(1971)には赤倉沢沿いに登山道が整備されていて氏は8月に75歳の藤島敏男氏とこちらを辿っている。

前日は国道289号線沿いの道の駅「きらら289」で車中泊、翌朝明るみ始めるのを待って動き出し、黒谷集落で「会津朝日岳登山口」の看板に従い黒谷川沿いに南へ進み白沢で右折する。



(会津朝日岳・赤倉沢登山口)

直進は倉谷方面となり城郭朝日山登山口はこちらになる。途中狭くなるが舗装された走り易い車道でじきに「イワナの里」となり、登山口はその先になっていた。

5:20「会津朝日岳・登山道」の大きな道標に導かれ出発する。しばらくは赤倉沢に沿って林道を緩く登る。これは楽ちんでいいやと思ったが、それはまったくわずかな区間のぬか喜び、じきに山道となりハーハー、ゼーゼー呼吸が乱れる。歩き始めて1時間程で「三吉ミチギ」という水場に到着水補給、ミチギとはどういう意味なのか首をひねるも分からず。

ここからブナ林の中ジグザグに急登が続き心臓パクパク、いつものことながら10歩進んで一呼吸を繰り返す。最近はこの頻度が激しくなったのは年齢のせいと違はなく、何とか誤魔化し誤魔化し上手く付き合っていくしかないというところ。

喘ぎ喘ぎ頑張るブナ林を過ぎ低木帯に入るとまもなくして視界が開け人見ノ松という見晴台に出た。田子倉ダム先大きな山容は浅草岳のようで疲れが少し吹き飛ぶ。天気はまずまず、雨の心配はなさそうで「ヨッシャー、行くぞ！」と活を入れた。

岩場を越え灌木の尾根を行くと叶ノ高手(1430m)で、その先にはクロベの大木が2本、ここで漸く会津朝日岳の堂々たる雄姿を拝むことが出来た(冒頭の写真)。「アリアリヤ!!あれを登るんかいな」とも登れそうもないそそり立つ北壁に息をのむ。谷川岳・一ノ倉沢のように谷が深く切れ込んだ暗く不気味な岩壁とは異なり、こちらは明るいスラブ状の岩肌が横に大きく広がって屏風のように前途に立ちふさがっている。雨なら即退散という所だが、この天気、これはラストチャンスなのだとい己を奮い立たせ前進とする。

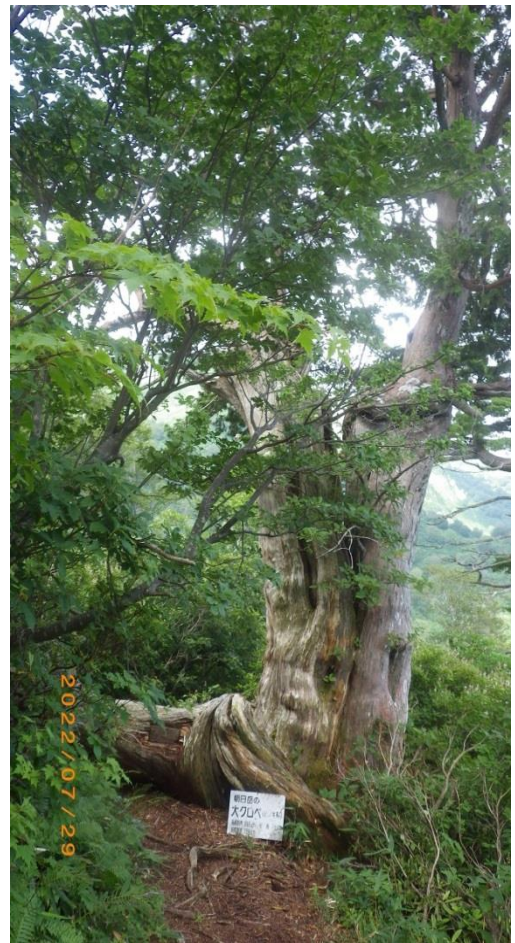
ブナ林の中、熊ノ平避難小屋を右に見て急登を休み休み行くと岩場に出た。ルートは中央のルンゼにあるようで、ロープも下がっている。草付き帯の最後の登りはかなり緊張したが、何とか登りきると先行者が独り寛いでいた。ここが頂上かと思ったが三角点はまだ先だという。標高はこちらの方が高そうだがともかく頂上を目指す。前方の丸山岳が大きく、こちらよりも200mほど高くこの山塊の盟主だろう。ここから縦走出来るらしいがもう無理だ。

往路は東北道から会津入りしたので、復路は小出から関越道経由で帰宅したが、こちらは田子倉ダムを迂回するくねくね曲がる山道が長く運転し難く草臥れた。

因みに水場の「三吉ミチギ」だが何時ごろから呼ばれるようになったかは地元の人に訊いても誰も知らなかったそうだ(「日本の名山シリーズ③〈尾瀬・日光と南会津の名山〉ぎょうせい社1983・皆川文弥)

《コースタイム》

赤倉沢登山口 5:20→6:25 三吉ミチギ→7:50 人見ノ松→8:30 叶ノ高手→9:10 熊ノ平避難小屋
→10:10 朝日岳頂上 10:20→11:05 避難小屋→12:50 三吉ミチギ→13:55 下山
所要時間 8時間35分 (上り4:50 下り3:35)



(クロベの大木)

▲△▲ その3 會遊の山々 美ヶ原(2034m) & 焼岳(2393m) ▲△▲

今夏は富士山、白馬岳、会津朝日岳といずれも8時間を超す強行軍で疲労困憊、特に妻と登った富士山11時間、白馬岳9時間15分はもう限界ギリギリ、かなり無理をしたようで疲労回復まで1週間以上費やしてしまった。会津朝日岳に57歳の時に登った望月達夫氏は著書「折々の山」の中で〈永く記憶から去らぬ山とはあまり簡単に登れてしまう山は物足りない。登りに少なくとも5時間以上かかる山でないと印象に残らない。藤島さんとは前にも鳥甲山等でこうした思い出を持っているが、今度の会津朝日岳もその一つであり、まさに忘れ得ぬ山となった〉と書いている。自分も実に不遜ながらつい先ごろまでは〈千石以下の山なんて山とはいえない〉等と嘯いて周囲の矚感をかっていたものだった。が、今回で思い知った。今後は高望みせずレベルに相応しい山を探さねばと選んだのがこの2山である。

◎期日：8月22日(月)～23日(火)

◎メンバー：赤澤他1名(妻)

●美ヶ原●



(王ヶ鼻頂上)



(送迎バス通う高原台地)

1日目＝焼岳の移動日だけではもったいないので行き掛けの駄賃で美ヶ原に向かった。1960年高校3年生の夏休み、級友3人と登って以来だから62年目だ。当時美ヶ原から霧ヶ峰へかけては筑摩山地と称されており山行目的が「中央信州筑摩山脈縦走」といかに仰々しいもの、山中4泊5日の山旅。

8月8日上野から直江津行きの夜行で大屋まで行き、上田丸子電鉄のガタガタ電車に乗り換え20分、運賃は20円だった（この電車は9年後の昭和44（1969）年廃止されている）。

丸子からはバスで約1時間、巢栗で下車し白樺平～牛伏山と歩き山本小屋のキャンプ場で幕営。翌日は茶臼山→扉峠→三峰山を経て和田峠で幕営したが接近する台風11号の影響か夜中から暴風雨となりテントの中まで水浸しとなり明るくなるのを待って這う這うの体でテント撤収、峠の東餅屋に逃げ込んだ。山岳部から借りたテントは使い物にならず、蓼科高原までの縦走は断念、バスで下諏訪迄下り茅野まで電車に乗り、茅野からバスで蓼科高原の新湯へ向かいバンガローを借り2泊、蓼科山に登った。

おバカな我が青春の1ページ、語り尽さないものがあるが、それはともかく今回は松本廻り国道254線～林道美ヶ原線を行き美ヶ原自然保護センターへ出た。ここはもう標高1900mの世界、最高峰王ヶ頭まで標高差130m、実に年寄り向きであるが、高原のど真ん中を牧柵に挟まれた広幅道路が設けられハイカーと観光客が入り混じってすれ違い、高原ホテルの送迎バスが行き来、山本小屋前までマイカーが入れるのには驚いた。遊歩道は覚悟していたがここまでやるかとの思い。62年前は柵などなく一面の草っぱら、牛馬がノンビリ高山植物を食んでいたもので、当時は牛よりも馬の方が多く、立ち込める霧の中水飲み場へ群れを成して走る馬達に驚かされた事を思い出す。台地の草原は緑だが高山植物の花はなく牧草ばかりのようで、復路に塩クレ場の手前から百曲り方面へ下ると遊歩道のバイパスがあり、こちらは人影まばらで花も咲いていて古い美ヶ原の雰囲気を感じることができた。

《コースタイム》

美ヶ原自然保護センター9:50→10:15 王ヶ頭→10:55 美しの塔→11:30 牛伏山→13:20 王ヶ鼻
→13:55 自然保護センター

●焼岳●



（煙る焼岳北峰。焼岳北峰・南峰鞍部より）

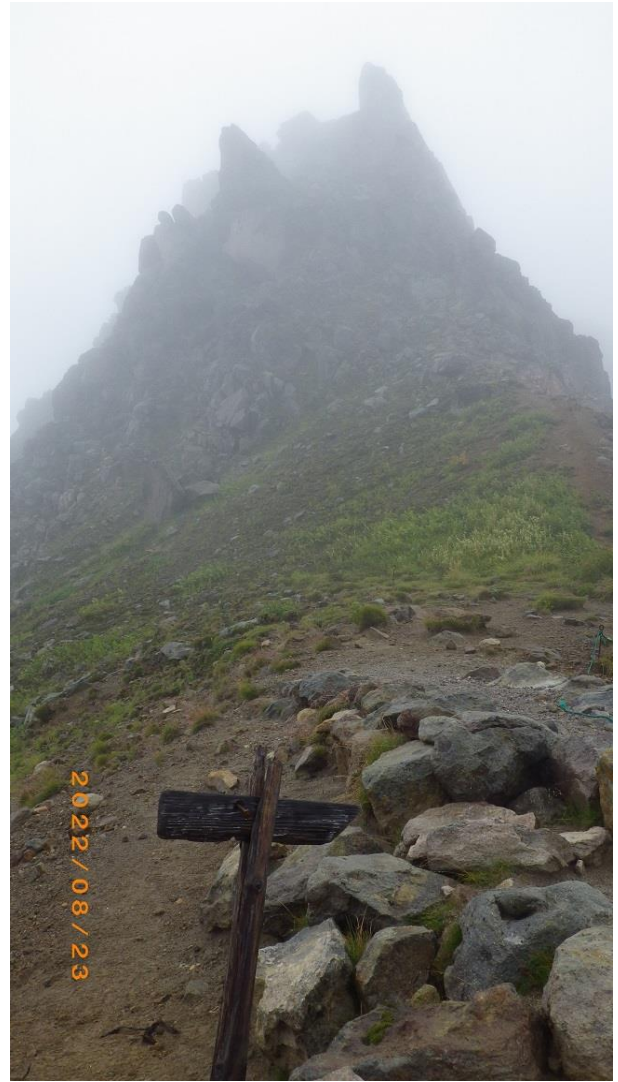
2日目＝焼岳は2度目だ。前回は丁度30年前の1992年7月盟友S君と5年計画でマッターホルンを目指していた真ん中の年、西穂～奥穂～大キレット～槍と歩き、下山後は白骨温泉・斎藤旅館泊、4日ぶりに観るテレビはバルセロナオリンピックで優勝した14歳岩崎恭子「今まで生きてきた中で一番幸せ」で盛り上がっていた。中の湯登山口（当時は梓川沿い）から上り2時間40分、下り1時間40分はまずまずのタイム、緑色の火口湖を眼下に呑むビールは格別で、当時はビールを担ぎあげ山頂で一杯は登頂の儀式、下山後に温泉で汗を流しそこでまた一杯、平気で車を運転していた時代だった。

今日の新中の湯登山口は旧館より3km程先になり、駐車スペースがないと聞いていたので早めに宿を出たのだが、6時半ではもう満車状態、仕方なく車道に沿って横駐車した。

6:40 出発。歩き始めて間もない樹林帯の中、雨が降り出し樹木の滴と相俟ってたまらず雨具を出す。乳白色のガスは深まり視界はせいぜい 200~300 ㍎、今日はダメかと滅入ってくるが何とか気を奮い立たせる。大展望を期待していたのでガッカリだがまあしょうがない。男の子を連れた若いお父さんと抜いたり抜かれたり相前後し登山口から丁度 3 時間で北峰・南峰の鞍部に到着。ゴォー、シューシューと噴煙上げる音が聞こえるがガスでその様子も見えない。さらに 15 分で北峰山頂に到着、霧雨の中強風に晒され寒くて休憩する気にもならず 2 人の写真を撮ってもらい早々と退散したのだった。往復 6 時間、今はこれ位までがいいところだろう。天気良き日に又来てみたい気もするが…………。



(焼岳頂上にて)



(焼岳・南峰、焼岳北峰・南峰鞍部より)

《コースタイム》

新中の湯登山口 6:40→8:20 広場→9:40 頂上稜線→10:05 焼岳・北峰 10:10→11:20 広場
→12:40 新中の湯登山口下山

(丁)